

建墓物語

Story of Stone

お墓をつくることは一生に一度の大事業。それぞれの建墓事例には様々なエピソードがあり、そこには石材店にとつての深い学びが込められている。今回の「建墓物語」は、自分や家族が入るお墓が必要になったことをきっかけに、縁起の良いお墓づくりを目指して5年の歳月をかけて建立された金子昌生さんにお話をうかがった。

「父がお墓に込めた母への想いを紡ぎ、子孫の繁栄・幸せを願うお墓づくり」

金子昌生さん (東京都)

お施主の金子昌生さんは東京・品川で不動産賃貸を中心とした事業を営んでいる。自社ビルの中にある社長室へ伺うと、そこは屏風や仏教美術品に囲まれた厳かな空間が広がっていた。

金子家の宗派である浄土宗の教えに篤く、自分の先祖の歩みや家のお墓の変遷についても詳しい。お墓参りも欠かさず、掃除の手際の良さから、通りがかりの人にお墓参りの代行業者と間違われた、というエピソードをお持ちの方でもある。

金子さんの曾祖父(明治元年生まれ)は台東区鳥越で家作(現在の不動産業)を営み、地元の鳥越神社の総代も務めていたという。その頃は江東区深川の寺院を菩提寺とし、さらに遠い江戸時代のご先祖達は、その永代供養墓に眠っている。まさに江戸の歴史と共に歩んできた家系である。



今年1月に完成した金子家の墓所

金子さんが自身のお墓について深く考え始めたのは今から6年前のこと。きっかけは、亡くなった叔父の納骨式だった。当時の金子家の墓所には既に十柱以上のご先祖が納められていた。



ガラスの墓標には阿彌陀三尊と法然上人の直筆文字を写した「南無阿彌陀仏」などが彫られている

「カロートの中はどうなっているのか」という不安を抱いた金子さんは、小さな納骨口からスマートフォンを差し入れ、カロート内を撮影してみた。画面に映し出された光景に金子さんは息を呑んだ。

「内部は先祖の骨壺でほぼ埋まっており、叔父の骨壺を入れたらもう隙間はありませんでした。カロートの床全面がコンクリートで固められているので、古いご遺骨を土に還すこともできません。結露による湿気も酷く、石屋さんが取り出すために少し骨壺を傾けただけで、縁から水がこぼれ出たのです。」



金子昌生さん

縁起の良いお墓づくりを追求

金子さんのお墓に対する並々ならぬこだわりには、原風景がある。それは若くして亡くなった母に対する父の深い情愛だという。

「私の母は37歳の若さで他界しました。私がまだ12歳の時のことです。父は早すぎる別れを嘆き、母が眠る場所は納得のいくものにならなくて、縁起を担ぎ、心血を注いで、曾祖父が建てたお墓を建て直しました。」

その時、お父さまはカロートにこだわったそう

しかし、このお墓で現実的な問題を全て解決するには、解体して作り直す必要がある。そうであれば場所自体も改めて吟味すべきではないか。そのように考えた金子さんは無理なくお参りができる距離で浄土宗の寺院墓地を探し始めた。特に、遺骨をカロート内の土に還すことができる、何よりも「大地の気」が感じられる清々しい墓地を探したが、理想の墓地にはなかなか出会えなかったという。

しかし、金子さんは焦らなかつた。ここから具体的な建墓に着手するまでの4年間、大正大学で「風水の作法を取り入れた建墓へ」を掲げる(株)新日本石匠の鷹野夕月専務のもと、



開眼法要の際に集まった金子家のご家族・ご親族の皆さんで記念撮影

「私の理想を形にできる石屋さんを探す」と探していた、様々なお墓関連のYouTube動画を観た金子さんはこれまでに情報収集を重ねる中で、様々な石材店の建墓例を見てきたが、「私が墓地の設計で石屋さんに求めるのは、慣例や単なるデザインの見地ではなく、『寸法の根拠』です。幅、高さ、奥行、その全てが縁起の良い数字にできるのか心配でした。」

鷹野専務は、どんなに細かな疑問をおついても、全て納得のいく根拠とともに、明快に答えてくれました。寸法を検討する時は、いくつか風水的に良いという候補を上げる一方で、避けたほうが良い寸法も教えてくれるので、本当に助かりましたと振り返る。

石塔は仏教を勉強する中で、覚悟上人にはじまる五輪塔が良いと考え、各部材の寸法は風水による考え方に基づいて決めていった。使用する石材については、鷹野専務の勧めで五輪塔に茨城県産の「やさとみかげ」を外柵には「やさと雲龍石」を選んだ。「やさとみかげ」は採掘元である(株)新日本石匠より協力ののもと、採掘された際の方角のまま置かれる「天地北斗の石」として製作・建立できたこと。また「やさとみかげ」特有の大きな石英が含まれることも決め手の一つになったそう。

一方、カロート内の構造については熟考が続いていた。「このお墓づくりでは理想のカロートについて、ずっと考え続けてきたと言っても過言ではありません。父も母のお墓を建てる際に一番力を入れたのがカロートのことでしたから、親子で同じことが続きますね」と金子さんは笑顔で話す。

多くの墓地を巡る中で、辿り着いたのが世田谷にある寺院墓地だった。ここは奇しくもお母さまの実家の菩提寺であり、金子さんも幼少期から慣れ親しんだ縁の深いお寺だった。

「墓誌には鷹野専務からのご教示で、先祖の生誕日や詳しい続柄を入れました。この作業を通して、以前から知っていた祖父は養子ということ以外にも、曾祖父も同じく養子だったとはじめて知ったのです」と驚く発言があったという。

鷹野専務は「金子様のお墓への深い知見から、ご質問に、毎回とても勉強させていただきました。開眼法要の日に至るまで、本当に濃い内容のやり取りをさせていただきました」と語る。

「取材協力」(株)新日本石匠

「私の理想を形にできる石屋さんを探す」と探していた、様々なお墓関連のYouTube動画を観た金子さんはこれまでに情報収集を重ねる中で、様々な石材店の建墓例を見てきたが、「私が墓地の設計で石屋さんに求めるのは、慣例や単なるデザインの見地ではなく、『寸法の根拠』です。幅、高さ、奥行、その全てが縁起の良い数字にできるのか心配でした。」

鷹野専務は、どんなに細かな疑問をおついても、全て納得のいく根拠とともに、明快に答えてくれました。寸法を検討する時は、いくつか風水的に良いという候補を上げる一方で、避けたほうが良い寸法も教えてくれるので、本当に助かりましたと振り返る。

石塔は仏教を勉強する中で、覚悟上人にはじまる五輪塔が良いと考え、各部材の寸法は風水による考え方に基づいて決めていった。使用する石材については、鷹野専務の勧めで五輪塔に茨城県産の「やさとみかげ」を外柵には「やさと雲龍石」を選んだ。「やさとみかげ」は採掘元である(株)新日本石匠より協力ののもと、採掘された際の方角のまま置かれる「天地北斗の石」として製作・建立できたこと。また「やさとみかげ」特有の大きな石英が含まれることも決め手の一つになったそう。

鷹野専務は「金子様のお墓への深い知見から、ご質問に、毎回とても勉強させていただきました。開眼法要の日に至るまで、本当に濃い内容のやり取りをさせていただきました」と語る。

「取材協力」(株)新日本石匠

「私の理想を形にできる石屋さんを探す」と探していた、様々なお墓関連のYouTube動画を観た金子さんはこれまでに情報収集を重ねる中で、様々な石材店の建墓例を見てきたが、「私が墓地の設計で石屋さんに求めるのは、慣例や単なるデザインの見地ではなく、『寸法の根拠』です。幅、高さ、奥行、その全てが縁起の良い数字にできるのか心配でした。」

鷹野専務は、どんなに細かな疑問をおついても、全て納得のいく根拠とともに、明快に答えてくれました。寸法を検討する時は、いくつか風水的に良いという候補を上げる一方で、避けたほうが良い寸法も教えてくれるので、本当に助かりましたと振り返る。

石塔は仏教を勉強する中で、覚悟上人にはじまる五輪塔が良いと考え、各部材の寸法は風水による考え方に基づいて決めていった。使用する石材については、鷹野専務の勧めで五輪塔に茨城県産の「やさとみかげ」を外柵には「やさと雲龍石」を選んだ。「やさとみかげ」は採掘元である(株)新日本石匠より協力ののもと、採掘された際の方角のまま置かれる「天地北斗の石」として製作・建立できたこと。また「やさとみかげ」特有の大きな石英が含まれることも決め手の一つになったそう。

鷹野専務は「金子様のお墓への深い知見から、ご質問に、毎回とても勉強させていただきました。開眼法要の日に至るまで、本当に濃い内容のやり取りをさせていただきました」と語る。

「取材協力」(株)新日本石匠

「私の理想を形にできる石屋さんを探す」と探していた、様々なお墓関連のYouTube動画を観た金子さんはこれまでに情報収集を重ねる中で、様々な石材店の建墓例を見てきたが、「私が墓地の設計で石屋さんに求めるのは、慣例や単なるデザインの見地ではなく、『寸法の根拠』です。幅、高さ、奥行、その全てが縁起の良い数字にできるのか心配でした。」

鷹野専務は、どんなに細かな疑問をおついても、全て納得のいく根拠とともに、明快に答えてくれました。寸法を検討する時は、いくつか風水的に良いという候補を上げる一方で、避けたほうが良い寸法も教えてくれるので、本当に助かりましたと振り返る。

石塔は仏教を勉強する中で、覚悟上人にはじまる五輪塔が良いと考え、各部材の寸法は風水による考え方に基づいて決めていった。使用する石材については、鷹野専務の勧めで五輪塔に茨城県産の「やさとみかげ」を外柵には「やさと雲龍石」を選んだ。「やさとみかげ」は採掘元である(株)新日本石匠より協力ののもと、採掘された際の方角のまま置かれる「天地北斗の石」として製作・建立できたこと。また「やさとみかげ」特有の大きな石英が含まれることも決め手の一つになったそう。

鷹野専務は「金子様のお墓への深い知見から、ご質問に、毎回とても勉強させていただきました。開眼法要の日に至るまで、本当に濃い内容のやり取りをさせていただきました」と語る。

「取材協力」(株)新日本石匠

家族の絆を未来へつなぐ

こうして部材の詳細が決まり、昨年8月より(株)新日本石匠の工場での石の加工が始まった。茨城県真壁産地の(有)坂口石材工業による協力も仰ぎながら予定通り加工作業が進められていった。

その後、11月の歎入れ式に始まり、旧菩提寺からのご遺骨の取り出し等の各儀式は、全てご先祖の祥月命日や回忌法要など、縁起の良い日取りを選んで進められた。

そして今年1月、開眼法要の日を迎えた。冬の澄んだ陽光を浴びて「やさとみかげ」の石英(水晶)が美しくきらめいていた。完成したお墓を前に家族・親族一同で新しいお墓の誕生を共に喜んだという。